「舞姫」が私たちに教えていること

私がこのテーマを選んだ理由は次の通りである。
最初にこの作品を読んだ時､豊太郎はとても優柔不断で人に流されやすい性格だと思った。そういう面で自分に似ているところがあると思い、ハッピーエンドではないこの作品だからこそ何か学べる物があるのではないかと感じたのでこのテーマを選んだ。

結論として、舞姫が私たちに教えていることは「自分の意志で決断することの大切さ」だ。このことについて二つの観点から説明する。

一つ目は、立身出世と関連する豊太郎の言動からだ。
社会が大きく変動した明治時代には、自分の能力によって上の階級にのし上がることが可能になった。必要なのは新時代の知識・学問であり、そうした修養によって地位を得ること（立身出世）は価値のある行為だとされていた。豊太郎の「我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ」という言葉から、彼にとって立身出世が大きな夢だったことがわかる。
だがドイツに行ってから、自分が今まで進んできた道、進んでいく道に疑問を持ちはじめる。自分は器械的に人に定められた道を進んでいるのではないかと感じたのだ。それから自分の好きなように行動した結果、仕事をくびになってしまった。「政治社会に出でんの望みは絶ちし」と言っていることから、一旦立身出世を諦めたことが読み取れる。
しかし相沢と再開し、天方と出会ったことで再び立身出世のチャンスが訪れた。相沢にエリスと別れ、出世の道に戻るべきだと言われた時、豊太郎は迷った。元の道に戻っても幸せが保証されているわけではないし、エリスの愛も捨て難かったからだ。豊太郎は地位も愛も両方欲しかったんだと思う。そして自分がどうしたいかでなく、どうすることが自分にとって一番有益なのかということしか考えていなかったのだろう。だから決断出来なかったんだと思う。その結果、立身出世の面ではいい方向に向かったかもしれないが、エリスはパラノイアになり、その原因である大切な友人の相沢を憎むことになってしまった。

二つ目に豊太郎の器械的な性格という観点に着目して説明する。
先ほど述べたように、豊太郎はドイツに行ってから自分が器械的な人間であるということをだんだん自覚し始めた。今まで官長・母親の思い通りで、都合のよい人間とされていたのだと否定的に考えている。そして官長への手紙の内容も反抗的なものになっていった。このことから、これ以上器械的な人間にはなりたくないと思っていることがわかる。
しかし、この決意も人間関係の中では簡単に壊れてしまう。相沢・天方にものを頼まれた時に豊太郎は断れずに即座に承諾している。その理由を、信用した人に突然何かを頼まれ

ると、先のことも考えずに承諾してしまうからだと言っている。そこには豊太郎の意志はない。結局は器械的な人間になってしまった。豊太郎自身もそれを後悔している。自分で器械的な人間になってはいけないと思いながらも、決断できないせいでそうなってしまうところに豊太郎の弱さがあると感じた。

決断をすることで失ってしまうものはあるかもしれない。しかし決断できず流されるままでいれば、大切なものを失うだけではなく、自分の行動に対する後悔がより大きくなってしまうと感じた。
この舞姫は、そうならないためには「自分の意志で決断すること」が大切だということを教えてくれていると思う。

参考資料：図説